

自由への《Les chemins》

川 神 傳 弘

サルトルの代表作の一つである長篇小説 *Les chemins de la liberté* はその邦題『自由への道』と訳されている。ところで、マルタン・デュ・ガールの *les Thibault* が『チボ一家の人々』であるのに倣えば *Les chemins de la liberté* は『自由への道々』乃至『自由への幾つかの、若干の、幾本かの、数本の、数々の、数多の道』なのである。又、*Les Mouches* は『蠅々』、『蠅達』であろう。勿論、『自由への道』なる邦題に何ら差障りの有る筈も無く、唯々日本語の名詞の複数形の欠如を慨歎するのみである。万一、日本語の名詞にも“ス”乃至“ズ”を後置詞として置き、『自由への道ズ』『蠅ズ』等と表記するようにすれば簡単で一層豊かなる表現が得られはすまいか？

いささか巫山戯た出出しに成ってしまったが、このタイトルに就いてのあとひとつの私見として、『自由への道』の“へ”の有無に関して、従来“へ”は不要也といった意見が有ったと思う。私個人の好みからすると“へ”は有っても無くても良いように思うが、サルトル学者のみならず文法の大家諸氏の御意見なども拝聴致したいものだとかねがね考えていたのであるが、そのうち沙汰止みになってしまったところをみると、“へ”の問題は大したことでは無かったものようである。

そこで、この小論に於ては自由への『道々』とはどのような道々であり、“へ”は有った方が良いか悪いかを作品を通じて考えてみたいのである。

※ ※ ※

ありとあらゆる新工夫、新技法で盛り沢山に演出された長篇『自由への道』は満艦飾の現代絵巻物であり、これが《自由のオデュッセイア》であ

ると言われるのも宜^がなるかなと思われるが、ややもするとそうした過剰演出故に、かえって作品自体を読みづらくしている感さえ抱かしめる。¹⁾

第一部『分別ざかり』では『モーリャック氏と自由』なる評論で主張した人物と視点の問題の実践の跡が見られ、第二部『猶予』ではドス・パンスの影響と云われる映画的同時性の技法が縦横に駆使され、第三部『魂の中の死』の第二章では全文改行なし、現在形時制のみによる動詞の使用法等による閉鎖的文体が試みられているという具合で、手法の上では相当念入りな配慮が為されている。

第一部で用いられる視点と作中人物の関係は“小説家は登場人物の内部と外部に同時に介入することは許されない”という「純粋小説²⁾」の原則を頑固に守ったもので、アンドレ・ジッドによって既に実験済みの内面描写法である。この工夫の作品効果上の価値はどれほどのものであるにせよ、サルトルは兎に角作中人物の『自由』を保障したわけである。

第三部に於ける『改行無し』の文章は、文の体裁から醸し出される緊迫と重圧が、余裕のない俘虜生活を描写するにマッチした体裁を整え、一方動詞は現在時制のみを使うことによって過去も未来もない、隔絶された絶望状態を表現するに効果をあげているが、こうした手法もつまるところ隔絶と閉鎖を描くことで逆に『自由』を浮かび上らせることになるのである。

ところで、第二部『猶予』に於ける映画的技法たる同時性を狙った、それこそ息をもつかせぬ極めてスピーディーな場面の連続的転移の方法であるが、こうした極端な場面の細切れ作業に関して一体どう考えればいいのだろうか。例えば『猶予』の冒頭部、第一章とも言うべき VENDREDI 23 SEPTEMBRE は54ページで、サルトルはこのスペースで1938年9月23日(金)という24時間の出来事——ベルリン、ロンドン、マルセユ、

1) Germaine Brée: An age of fiction, 邦訳『小説の時代』(紀伊国屋書店)において、ブレ女史は「サルトルの新技法は理論的には正当であっても、彼の根本的な小説技法に矛盾しており……小説が意図した効果をだいなしにする退屈な過程となっておる……」と非難している。

2) 『贖金づくり』

プラーグ etc. といった具合にヨーロッパのあらゆる地域での人々の営みを上は政治家から一般庶民に至るあらゆる階層にわたり洩れなく記載している。この一日で登場する人物名だけでもざっと70名。場面は次々と目まぐるしく変り、うっかりすると読者は何時何処に居るのかを見失い混乱する。故にプロットなぞの成立する余裕もない。

Il lâcha le sac, s'assit dans la rigole de vin ... il n'avait jamais pleuré si fort depuis la mort de la vieille. / Charles était tout nu, les jambes en l'air, devant six infirmières-majors, / la plus verte battit des ailes et remua les mandibules, ça voulait dire: bon pour le service; / Mathieu rapetissa et s'arrondit, / Marcelle l'attendait, jambes écartées, Marcelle était un passe-boules, / quand Mathieu fut tout rond, Jacques le lança ...³⁾ 以上は原文にして9行の文章であるが、A B C D E Dと5回も場面は転換する。一文中で2, 3度転換する場合もあり、その他『猶予』の全般にわたって同様の作業が為されており、こうした例は挙ぐるに事欠かぬ有様である。映画的とはいえ、万一これらを映画のスナップに直してみたかどうかを考えると、わづか5秒間に4乃至5の場面が、しかも夫々異なる場面が連続的に映写されるに等しい状況であるから、これは超前衛的アンチシネマ以上の怪奇なものを想像せざるを得ない。見返しの不可能な映画と違い、読み返しが出来る点では、小説に於けるこの技法の採用は有利と言えるかも知れないが、余りにも行過ぎた極端な細切れシーンの羅列が果してどれほどの効果を生み出せるのかという疑問が残るのである。

以上の如く、この作品には先ず方法論的な無理が感じられる。勿論技巧過多という意味合いに於いて。そして、こうした過剰演出気味の種々様々な技法の運用を、執筆者は作品自体への効果を考慮しつつも猶これには目をつぶり、強引かつ積極的に導入していったふしが見られる。思うに、強

3) Jean-Paul Sartre: Les chemins de la liberté, T. II Le sursis., p. 149

引極まるこの過剰演出はこの作品のテーマ『自由』、それも様々な自由の形態及び生態をより鮮明にクローズアップする手段方法として採用されたもののように思われる。

サルトルが作品としての芸術性（美的価値）を犠牲にしてまでも訴えんとした『自由』、及び『自由への道々』の理想像はどのようなものなのかを、作品 *Les chemins de la liberté* に限って考えてみたい。

※ ※ ※

第一部『分別ざかり』の主人公は Mathieu と断言しうる。サルトルは Mathieu を通して一つの『自由』の在り方、自由の概念を示している。

作者の分身とも見える知識人 Mathieu は少年期⁴⁾より常に《être libre》、自由であることを切望し、常に être libre を念頭に置いて行動する人間である。愛人 Marcelle と結婚しないのも、愛人の孕んだ自分の子供を墮胎させようと奔走するのもすべてはそうした世間的^{しかる}柵から逃れて、責任逃れの位置に自分を置くことで、あらゆる束縛から解放されたいがためなのだ。入党を拒み、Lola から金を盗めぬ自分に満足するなどもすべてはそうした無責任地帯への逃避行為である。しかし、こうした自由は真の『自由』ではないのではないかという猜忌心は徐々に Mathieu の心中に募る。Une seconde encore il lui sembla qu'il restait en suspens dans le vide avec une intolérable impression de liberté.⁵⁾ いわば足が地についていない生活感覚、A quoi bon décider d'être libre?⁶⁾ こうした自由は無益なものであるという自覚も芽生える。世間並みの見方では《Sa liberté !》... 《Ça n'aide pas à virre, la liberté.》⁷⁾ と Marcelle が考える通りの自由。つまり、あらゆる必然性から完全に解放された絶対的自由、

4) “Il avait seize ans ... Il s'était dit: 《Je serai libre》,” *Les chemins de la liberté*, T. I. L'âge de raison., p. 55

5) *Ibid.*, p. 71

6) *Ibid.*, p. 133

7) *Ibid.*, p. 74

言い換えればすべての責任を逃れた嬰兒的放縱に近い *débauché, indulgent, libertin* の状態だ。無責任でひ弱いインテリの一アナーキスト、無気力で無力で幾分頹廢的アナーキストを通して、サルトルは消極的自由、ネガティブな自由、『負の領域の自由』を描写しているのではないか。負の領域の自由とは、建設的な何もかも有たない放縱の概念であり、つまりはニヒリズムを意味するのだが。

インテリとしてのサルトルは多分に自分自身への辛辣な自戒の意をこめて、『分別ざかり』の *Mathieu* を描写したのではないかと思われるが、こうした形の『自由』を今仮りに『自由A』と指定する。

Mathieu 即『自由A』は、党员 *Brunet* に或る種の羨望を感じているが、それは *Brunet* が人生に対して確信をもって生きているからである。*Brunet* は *Mathieu* にこれまでの一切を振り切って入党すれば意味ある人生が送れるだろうと入党を薦める。

—Tu as renoncé à tout pour être libre. Fais un pas de plus, renonce à ta liberté elle-même: et tout te sera rendu.⁸⁾

Mathieu も *Brunet* の意見の正当性を疑わない。

Entrer au Parti, donner un sens à sa vie, choisir d'être un homme, agir, croire. Ce serait le salut.⁹⁾ 入党し、人間たることを選び、行動し、信じること；これが人生に意味を与えることであり救いでもあるのだ。

Mathieu は考える、*je ne peux pas m'engager, je n'ai pas assez de raisons pour ça.*¹⁰⁾ しかし、入党の理由が見つからぬという理由でこれを拒否する。そして、*J'ai refusé parce que je veux rester libre*¹¹⁾：結局、自由でありたいために元の鞘に納まってしまう。なんのことはない、懷疑と逡巡の果ての堂々めぐりに終止しただけのことである。

8) *Ibid.*, p. 127

9) *Ibid.*, p. 129

10) *Ibid.*, p. 130

11) *Ibid.*, p. 133

自由Aの Mathieu のこうした態度はインテリ特有の弱みでもある懐疑主義的精神に基づく不可知論的なものだ。

Brunet は逆にそうした不可知論とは対蹠的な位置にある『唯物論』の側の人間である。

『唯物論』は科学である。科学の側の人間には懐疑や逡巡は無い、或いは有ってはならない。科学とは合理主義の産物であり、合理主義は懐疑、逡巡を消去するための手段であるのだから。

Mathieu ははっきり認める。《Il est plus libre que moi : il est d'accord avec lui-même et d'accord avec le Parti.》¹²⁾

入党することによって自己の自由を抛棄した党员 Brunet の方が、却って Mathieu よりも『自由』であるというこの『自由』を、『自由B』とする。

もう一度簡単に『自由A』と『自由B』を比較してみると、まづ自由Aは、*cette liberté qui consiste à ne pas en faire usage, cette liberté retenu, avare d'elle-même et donc vaine et inefficace, avec la même amertume qu' Orest avant sa conversion ... Las de se réserver toujours pour une occasion ...*¹³⁾ とアルベレスは表現しているが、*retenu, avare, vaine, inefficace* だけでは舌足らずなのであって、*enfantin, libertin, indulgent, débauché* 更に *irresponsable, incapable* 等を追加してしかるべきであろう。無責任性、幼児性、放縦、無益、出し惜しみ、無効性等々を包攝する『自由A』は、恰も子供が悪戯をした後で親に弁解を繕う自由を主張する類いの自由である。

要するに自由Aは「束縛からの解放」「あるものからの離脱」であり、あくまで主体は束縛、あるものであるが故に、ここでは自らが自己原因になっていないという意味では『自律』の概念が抜けているのである。ある

12) Ibid., p. 129

13) R.-M. ALBÉRÈS: Jean-Paul Sartre, EDITIONS UNIVERSITAIRES., p. 102

ものが原因でそこから脱出せんとする姿が自由Aであり Mathieu なのだ。しかし、こうした『他律的自由』は既に見てきたように、懷疑と逡巡を繰り返しながら一本の円周上を循環するような堂々めぐりの運動を意味するだけである。遠心力を絶ち切って円周軌道からはずれるためには「存るもの」という紐を切る必要がある。つまり自分が自己原因に成るわけだ。

自由Bは円周軌道をはずれて次の段階に入った自由といえる。先に述べたように『自由A』はニヒリズムの自由である。一方、『自由B』は建設的な意図を有ち、合理主義と科学をふまえた自由である。それは「あるものを形成する自由」であり、自分が原因となって、自分が作る行動的な自由だ。したがって自律的な自由ともいえる。

「自由においては人間の存在はこのネアンティザションという形の下にある固有なる経過である」¹⁴⁾と語り、更に『自我の超越』に於いて、無なる自己を含む人間現実、有るものではなくて、成るものであることを謳った時点で、サルトルは否定の概念に基づいた本来的な意味での自由を明確にしている。歴史的、時間的な生成、発展過程に於ける弁証法的運動の中で演じられる、存在と非存在との交代劇としての自由——現象学の中核思想である「志向性」(Intentionalität)をふまえた人間存在の意識としての、何物かであることの自由ではなくて何事かを為す実践的自由である。そして、この「志向性」は確定した目的を有たず、漠然とした projet を有つ不確定な目的意識として、人間存在をして投企的存在たらしめる契機と成っており、これの有無によって『自由B』は『自由A』とは劃然と区別される。《Il est tout à fait calme, à présent, il pense: partout où il y a des hommes, j'ai ma place et mon travail》¹⁵⁾ ... しかも、s'engager した人間は常に複数他者との連繋のうちにある、つまり réalité との

14) “Dans la liberté l'être humain est son propre passé (comme aussi son avenir propre) sous forme de néantisation.” Jean-Paul Sartre: L'être et le néant., p. 65

15) Jean-Paul Sartre: Les chemins de la liberté, T. III La Mort dans l'âme., p. 219

contacte が密である，従って Brunet には Mathieu のような inquiétude も無い。Brunet に代表される『自由B』は少くとも『自由A』に比しては actif, constructif, intentionel またAの morne, mélancolique に対しては positif な，陽性の自由といえる。

※ ※ ※

不可知論の所産たる無気力人間 Mathieu を『自由A』，一方にはそうしたニヒリズムを脱却した人物 Brunet の『自由』の如く人物を類型化することはサルトルの主張に反することではあるが（登場人物の自由を奪い，人物に個性のレッテルを貼り付けるが故に），人物の類型化は小説というものの性格上止むを得ぬところのものではないだろうか。この問題に就いてはまた将来考えてみたい。

兎に角，『自由』の典型としてサルトルは Mathieu に代表される『自由A』，Brunet に代表される『自由B』を設定した。

しかし，これら『A』『B』二つの自由は同一平面上に置かれた，並列状態のものではない。結論的に言って『B』は『A』の発展した姿として捉えられている。註（14）の記述からして，そうでなければならない。在る状態を否定することで次なる段階へ……という形式の否定作用による歴史的発展のムーヴメント自体が『自由』そのものであるのだから。従って，『自由A』以前の状態は当然なければならない。これがサルトルの言う《lâches》，《salauds》であり，こうした在り方は《de mauvaise foi》であるとして彼の最も忌嫌しているところである。懲兵義務故に戦場に赴いて戦死する者，結婚の契約を尊重して妻を裏切れない亭主等は《lâches》，世界が神の御心によって救われていると考える者は《salauds》，つまり現状を全面的に肯定し，旧守のモラルに追随しながら，何らの疑問も起きぬ人々，こうした人々は物体に等しい《l'en-soi》（即自存在）であるとする。Les chemins de la liberté に於ては Mathieu の兄 Jacques が lâches, salauds の典型として描かれている。また，Mathieu の愛人 Marcelle は《lâches, salauds》の状態から Mathieu の『自由A』の段階に上昇しよう

と努力しつつも失敗してしまう人間として描かれている。

かくして、先づ《l'en-soi》の状態が惜定され、それを否定して『自由A』、更に『A』を否定して、次なる段階『自由B』と発展運動は進められたわけである。

サルトル思想の展開針路、その方向は最終的には彼の小説、戯曲等と同一軌道上に在ると言えるが、彼の思想形成の進展速度と小説、戯曲等の登場人物の生き方の間には少しく時間的なズレが見られる。Brunet に代表される『自由B』が明確な形で、思想的にも是として打ち出されるのは『弁証法的理性批判』に於いてである。Les chemins de la liberté の L'âge de raison からおよそ15年が横たわっている。『分別ざかり』の Brunet の扱いは Mathieu に比して若干軽くみえるのであるが、これは執筆者が理性面では Brunet に理想像を求め乍らも心情的には Mathieu に愛着を感じているとみられることから、この時期のサルトルは共鳴を感じつつも心底より Kommunismus に傾いていたとは考えられないのである。

サルトルの哲学を前後で大きく二分するならば前半は『存在と無』、後半『弁証法的理性批判』であると言える。従って『自由A』→『自由B』=『存在と無』→『弁証法的理性批判』とも言える。

しかし、時計の振子の如き振幅運動を繰返しつつ一段また一段と上昇（止揚、aufheben）することを宿命づけられた『自由』の性格上からして、決して『自由』は停滞や凝固を許されない筈である。《lâches》《salauds》→『自由A』→『自由B』と辿り来て次なる段階は当然予想されていたに違いない。それは第3部『魂の中の死』に於ける Mathieu の自発的な行為としての戦闘参加に求められたのではないだろうか。最早生還の望みの無い絶望的な戦闘、敵の進撃をわずか15分ひきのばすためにただ一人になって射ちつづける Mathieu の姿は、この作品全篇を通して最も感動的な場面と言える。しかし、この感動は従来の小説の枠を超えるものでは残念乍らない。身を棄てる自己犠牲と行手に待ち構える“死”の存在がこのシーンの Pathétisme を生んでいるだけである。更に一方的な勤ぐりを承

知でいえば、サルトルは思想的にも、小説としてもこの場面で決着をつけたかったのではないかと思われるのだ。何故なら、ここには「美的なもの」と「哲学的なもの」の融和が見られるからだ。

「倫理」と「美」の融合が散文芸術の理想的なパターンの一つであるとすれば、我々はここに『美＝死＝自己犠牲＝倫理』の典型を呈示されたわけ、これに勝るエンディングは無いのである。しかしサルトルはここで筆を置かなかった。何故か？

確かに小説を芸術作品としてのみ鑑賞する立場から言えば、ここで Mathieu を殺してしまえば片が付くのである。しかし、芸術家としてのサルトルがこれを容認する以上に、イデオログサルトルとしては『自由』の理想像の追求が急務なのである。従って Mathieu を殺せないし、物語りも終れないのである。死は美しいが、美しいだけに生きることの役には立たない。生に資するものは「倫理」である。サルトルの求めるものは『自由』の倫理である。

ところで、サルトル的選択の特徴は〔行為の無動機性〕にあり、〔無償の行為〕にある。女学生 Ivich の目前で自分の掌をナイフで突差す行為とポン・ヌフ橋の上ではじめて『自由』を意識して死を賭けた戦闘行為に及ぶことの間には、『自由B』の立場から見ると何の差異も無いきわめて無駄で、不毛な行為であり、いずれも『自由A』のカテゴリーを脱け出していない種類の自由である。

無償の行為というものは文学的には何かしらハイブrouな響とニュアンスを持った、心地よげな言葉ではあるが、実生活の上ではまったく役に立たぬいじけた日陰の萌^もの如き観念にすぎない。合理主義や科学の立場からゆけば凡ゆる行為は計算し尽された、無駄のない行為でなければならないのだ。だから、ポン・ヌフ橋での身を挺した戦闘行為の体験から得た『自由』は、Mathieu 個人の自己満足の材料としては大いに役立ったのであるが、サルトルの追求する『自由』の最終的なイメージからは既にかけて離れた『遅ればせの自由』と成っていたのだ。いわば、サルトルはここで完全

に Mathieu から脱皮したわけである。

『自由A』及びそのアンチ・テーゼとしての『自由B』、これらを止揚した形として、Mathieu の自己犠牲的戦闘『参加』が『自由C』である筈であった。しかし、こうした形の『参加』は作品内状況よりみて、行為そのものが何ら合目的でなく、無軌道無動機なひとりよがりの感傷的なものであるが故に、Mathieu を戦死させることでは解決がつかなく成ってしまったのである。

※ ※ ※

サルトルとしては Mathieu という駒をここで捨てることは出来なかった。Mathieu の生死が有耶無耶のままに置かけた所以である。サルトルはこの持駒をこのまま保留して置き、機会があれば何処かで理想的なヴィジョンに於ける明確なイメージの基に勝負を賭ける切札として使用するつもりであったかも知れないが、これは単なる臆測である。現実には、サルトルの筆は Brunet『自由B』の完成に向ったからである。つまり、『自由A』に対するアンチ・テーゼ『自由B』、これらを止揚 (aufheben) するに先づ Mathieu『A』を中核素材として利用し、これに失敗、次いで『B』の Brunet を中核素材として使用を試みたわけである。結果的にはこれも成功しなかった。何故か？ ここにはサルトル哲学に於ける矛盾律の問題が大きな壁として立ちはだかっていたからであるが、それ以上にこの『自由』の問題は一般的、普遍的問題としての〔小説と倫理〕の問題に及ぶからである。

サルトルが『存在と無』等の存在論に偏している限りは自由な作家活動が可能であったろう。しかし、彼の実存主義は《哲学者は世界をいろいろに解釈してきたただけだ。だいじなことはそれを変革することなのに》と述べたマルクスの言葉に呼応するものとして発展すべき宿命を背負っていた。故にサルトルは何よりも実存主義の éthique (倫理) を示す必要にかられていた。当初より、Zur Sache selbst! (事柄そのものへ!) のフッサールの現象学から出発したサルトル実存主義は、対象を、人間を究極まで微

分することにより意識を〔非人称的意識 (Conscience impersonnelle)〕に迄分析し尽したのであり、このような考え方の地盤にあっては最早人間存在は《人間》としては扱われていないのである。意識は純粹現象であって主観的心理意識ではなく、自我はここにあってはこの意識の対象にすぎない。人間の主体性回復を目指す筈の哲学の基盤には実は、こうした非人間的、無機的土壌があり、18世紀フランスに於ける機械的唯物論の残滓が窺えるのである。また、エポケーによって殊更《有限、不条理、不安、絶望》等を強調することは全く生の哲学、生きる倫理に資するところはない。また、サルトル哲学の重要基本概念の contingency (偶然性) は『B』の立場たる causalité (因果関係) によって自然を説明し、理論づける近代科学的立場の唯物的自然観とはまったく相容れない。偶然性の化身『自由A』と因果律の化身『自由B』は絶対矛盾の位置にあるのだ。

このように、彼の存在論と彼の意図との自家撞着及び後半のサルトルの理想的倫理とその実践方法の間に在る自家撞着というこれら二つの矛盾を一挙に止揚しうるべき『自由C』は、美的立場の放棄とともに崩れ去った。

※ ※ ※

次のように考えることも出来る。『自由B』の地平に片足を置くことによってサルトルの「美的側面」はせばめられた。しかし、これが消滅することはありえない。

一般的に、小説家を含む芸術家の美の立場は《偶然性》に負うところ大なるそれであり、思想家、哲学者等の倫理的立場(美に対する善の立場とも言える)は《因果律》に負う部分の大きい立場と思われるが、この作品に於いてはサルトルの夫々の自由が美的立場の自由(例えば『A』)及び倫理的立場の自由(例えば『B』)に分裂し、夫々が執筆者を離れて競い合い、絡み合っているかに見える。こうした事実が必然的に執筆者をして、古来作家に宿命であった問題“美のために書くのか? 善のために書くのか?”という袋小路へ再び、自然のうちに追い込んだように思われる。

ひとたびは『自由』の倫理追求に急なあまりに美の立場を軽んじた執筆

者ではあったが、あくまで『小説』という形式のもとに理想のイメージを創造する限りは、完全に美の立場を離れ去ることは不可能であったと言うべきか。つまり、サルトルは Mathieu から完全に脱皮するというわけにはゆかなかつたのだが、こうした面からも小説が完結されずに終わった理由が窺える。いづれにせよ、万一『自由C』の姿が明確に成っていたならばこの作品は完成を見たことだろう。

Les chemins de la liberté は内容、形式とも実に豊饒であり、『自由』の様々な衣装に彩られた絢爛たる Odysseia は哲学、心理学、倫理等々を小説という日常語の世界の坩堝の中で熔解、再構成、イメージ化する作業を通して、サルトル自身の自由の理想像を『倫理と美の融合体』として呈示せんとする一大試みであった。テーマ、衣装ともに豊饒に過ぎ、余りに多くを欲張って収拾のつかなくなった嫌いはあるにせよ、サルトルのこうした何一つも忽ゆるがせに出来ないという資質は尊いものだと思われるし、また唯物論的科学に共鳴を覚え乍らも、完全に科学の側に身を任すことの出来ぬサルトル的体質には、哲学者でありながらも多分に心情派であるサルトルが垣間見られ、ここにも我々は真のヒューマニストたらんとするサルトルの意気込みを感じるのだ。

ともあれ、liberté 到達の chemins は余りに遠く、残念乍ら我らがオデュッセイは妻ペネロペに再会することは出来なかつたのであるが、我々はこの道程に様々な『自由』の在り方を学んだ。『自由への道々』はもっと多くの類型に分類されうる。以上ここで示したものは最も簡略な図式 A・B・C に過ぎない。そして、冒頭で触れた“へ”の問題にも既に自ら解答が出てしまった。[lâches, salauds (l'en-soi) → 『自由A』 → 『自由B』 → 『自

16) 猶ほ、《lâches》《salauds》《mauvaise foi》等に就いては次の二著に見解を求められる。

PIERRE DE BOISDEFFRE: MÉTAMORPHOSE DE LA LITTÉRATURE
☆☆ DE PROUST A SARTRE, ÉDITIONS ALSATIA., p. 250~257
ANDRÉ MAUROIS: DE GIDE A SARTRE, LIBRAIRIE ACADÉMIQUE
PERRIN., p. 290~

由C』) と時の経過とともに段階的發展を遂げることを考慮するならば、この chemin は INGRID JOUBERT の言うように “La Liberté comme Itinéraire” (道程としての自由) と考えるのが妥当であろう。¹⁷⁾ 故に、Les chemins [de] la liberté はやはり『自由への道』が良い。

(本学非常勤講師)

17) INGRID JOUBERT: ALIÉNATION ET LIBERTÉ DANS LES CHEMINS DE LA LIBERTÉ DE J.-P. SARTRE, Didier., p. 161